



「平成29年度市民学芸員の会」の各グループが活動を開始しました。この第20号では、本年の実績と予定並びに、情報発信グループの調査結果を報告します。

開講からの講演会記録と予定

- 第1回 4月30日 開講式 ～ 於 本郷生涯学習センター
演題「三原浅野家の石造物について」
講師 特定非営利活動法人広島文化財センター 濱岡 大輔
- 第2回 7月30日 ～ 於 城町庁舎大会議室
講演「宮本常一先生と三原」
講師 元神奈川大学教授 香月洋一郎
- 第3回 9月24日 ～ 於 本郷生涯学習センター
講演「日本の民家」
講師 奈良文化財研究所 主任研究官 西山 和宏
- 第4回 12月3日 ～ 於 本郷生涯学習センター
講演「日本の無縫塔」
講師 (公財)元興寺文化財研究所 主任研究員 佐藤 亜聖
- 第5回 1月21日 ～ 於 城町庁舎大会議室
各グループ活動発表



〔第1回目の講座風景〕

《小早川隆景ものがたり》… 全講演終了（於 リージョンプラザ 文化ホール）

- 5月 7日 講演「小早川隆景の伊予支配」 三重大学教授 藤田 達生
5月28日 講演「小早川隆景と名島城・博多」 福岡市埋蔵文化財センター
所長 大庭 康時
6月 4日 講演「蓮台に乗った小早川隆景」 美術史家 文学博士
關 信子
6月18日 講演「三原隠退後の隆景と家臣・家族, そして社会」
広島大学大学院教授 本多 博之

各グループの活動予定

情報発信グループ、宮本常一写真収集グループ、三原古写真収集グループ、城下町体験グループ、城館体験グループ、三原遺産研究グループそして市民学芸員運営グループは、前年度の活動を継続し、今年度は、集大成のつもりで取り組みます。

【質問受付】この「みはら玉手箱」への質問等は
三原市教育委員会文化課
bunka@city.mihara.hiroshima.jp宛に
お寄せください

みはら おもしろクイズ



(解答は3/13頁の欄外にあります)

「鯉の城下町構想」錦鯉放流イベント

平成29年5月27日(土) 「瀬戸内三原 築城450年事業」の記念すべき年に、三原の新名所「三原城跡歴史公園」の堀に240匹の錦鯉が放たれました。JR三原駅に近接した堀で優雅に泳ぐ姿は、見る人の心を和ませており、こうして、「鯉の城下町」が誕生しました。

広島経済同友会三原支部が数年前から企画し、大和町の阪井養魚場の無償提供によって実現したものです。放流イベントの様子と鯉や錦鯉について調べた一端を以下に報告します。

1. 放流イベント



〔天満市長祝辞〕



〔放流前に生け簀で待機の錦鯉を眺める参加者〕



体長 97cm 重さ 21kg

〔2017年の内閣総理大臣賞受賞鯉※ 〕

※ 阪井養魚場は、過去にも 9回受賞



〔生け簀で群れる錦鯉〕

〈堀に設けられた特設栈橋にて〉



〔ビニール袋に入れた錦鯉を持つ来賓の方々〕



〔ミスやっさも放流に参加〕



2. 放流された錦鯉



〔大量発生した藻の間を縫って泳ぐ錦鯉〕
H29.6.03撮影



〔藻が撤去され伸び伸びと泳ぐ錦鯉〕
H29.6.13撮影

放流後数日の間に、写真のように藻が大量発生し、錦鯉生息への影響が心配されたが、阪井養魚場のご指導を得て、撤去されました。現在は、三々五々あるいは写真の様に、隊列を組んで伸び伸びと広い堀を遊泳しています。

3. 錦鯉と鯉の豆知識

「図説 魚と貝の大事典 魚類文化研究会+雅麗 編集、柏書房(株)発行」の解説

- (1) 新潟県小千谷市を中心とする魚沼地方の特産物である。色ゴイは野生ゴイが突然変異を起こしたもので、その後改良が重ねられ、今日見られるような品種が開発された。天明の頃、日照りのために絶滅に瀕したという記録があることから、鑑賞用としての歴史は古いことがわかる。初めは緋ゴイ、浅黄、べっこうなどがあったが、明治時代初期には、更紗、黄写などの品種が生まれ、大正3(1914)年に東京で開かれた万国博覧会への出展を機に全国に名を広め、海外に輸出するまでになった。

種類はそのほか、紅白、白無地・赤無地、三毛、白写、昭和三毛、各種銀鱗、銀棒、金鱗、虎斑、茶ゴイ、銀宝来などがある。※

※ 近年は、海外の錦鯉との交配も進み、種類は増加しているようです。

- (2) 「鯉」の漢字は、身に縦列36のうろこがあり、36町は一里なので、「里」を用いた。

4. 堀を泳ぐ魚の変遷 海魚 → 鯉 → 錦鯉

- (1) 安政6(1859)年、越後長岡藩の家老河井継之助が西方遊学で残した旅日記『塵壺』には「城之堀りニ海魚多遊居リ」との記述があります。
- (2) 平成28年10月1日(土)、320人のボランティアで、かいぼり(堀さらい)をした際大量の鯉が保護されました。
- (3) そして、今回、錦鯉が放流され色鮮やかな名所に生まれ変わりました。

おもしろクイズ

平成29年5月27日(土)三原城跡歴史公園の堀に放流された錦鯉の数は何匹だったでしょうか。
(ヒントは本文に記載されています)

- (ア) この世界に誇れる美しい風景を100年以上守ることを願って100匹。
(イ) 放流第一段として、240匹。
(ウ) 三原城築城450年を記念して、450匹。



旅日記『塵壺』



三原のお祭り



ボタン・ふじ祭り2017

花の名前を冠した祭は、近隣では世羅町が有名ですが、三原にもこんな立派な“花の祭”があります。

場所は、三原市高坂町許山337 高坂自然休養村の大番ボタン園です。



[階段状の手造りの花壇で咲くボタン達]

毎年、4月末から5月の始めにかけて咲き誇る豪華なボタンを堪能することができます。近年は温暖化のため4月25日ごろには満開になっていましたが、今年は少し遅れているとのこと。

現在の大番園長は2代目で父の代（今から約50年位前）にこの地で葉タバコの栽培に取り掛かれ同時にブドウやボタン・シャクヤクなども栽培され

ました。その後、葉タバコはやめられたものの、ブドウは佛通寺ブドウとして人気が高く市場には出回らないようです。今の園長の代（約30年位前）になってルピナスやジャーマンアイリスも手がけられましたが、この地の気候に合わずジャーマンアイリスは消滅し、ルピナスもしばらくの間良く出来ていたものの、やがて連作障害を起こし見ていただく花にならなくなったそうです。

現在は、7ヘクタールの敷地に、ボタン品種200種類以上（正確には把握されていないそうです）、株数1000株以上、シャクヤク等を多く栽培しておられます。その中でも特別に来園者に見てもらいたいのが「この花たちです」といって案内されたのが、園内に一歩足を踏み入れたところにある花壇で、園長が5年から10年をかけて栽培したオリジナルなボタン（胡蝶の舞・オーロラ・向陽・縁結び・マリモ・桜の輝き等など）が目を引きました。

「今年は、春先の気温が低かったため開花が遅れ満開は、ゴールデンウィークの頃になるので大勢の人出を期待しております」と園長の言葉。

「平年ではどの位の来客がありますか」との質問に「年間1600人位かな」との答え。

「毎年美しい花を咲かせるために、寒の明ける頃遅効性の寒肥と、お礼肥といって花が終わったあとにやる即効性の肥料は欠かせません。又同時に剪定も大切です」と花を愛でながら話される園長の横顔を見ることが出来ました。

今年は、外国産（中国・アメリカ・フランス）のボタンも仕入れて交配を試みるとの事、5年後には新たな品種のボタンが誕生することでしょう。楽しみも多いですね。

連休の終わりに「今期の入場者数は」と聞くと、「1009人でした」とのことでした。



[花を語る大番園長]

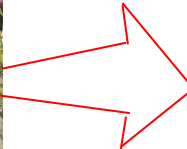


[オリジナルなボタンの花壇]



[大変珍しい糸葉シャクヤク]

大番ボタン園のボタン類を集めてみました。



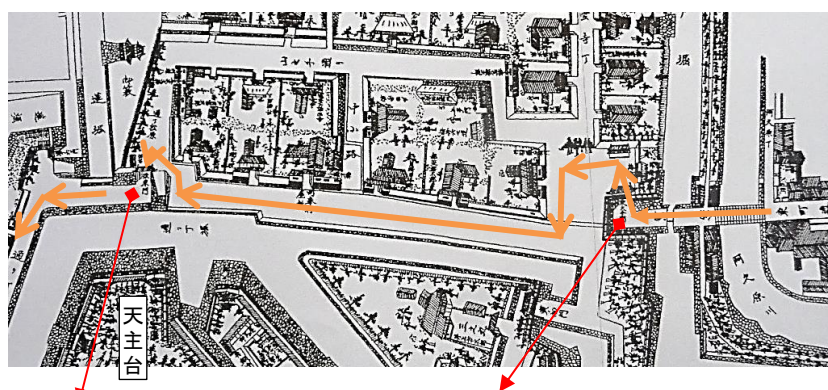
[シャントール]

石碑が語る三原の歴史

今回は小早川隆景公のお膝元三原に帰ってきました。永禄10(1567)年築城、実に450年前の威容を留める、国の史跡、三原城です。すでに発掘調査されていたお堀端周辺がようやく整備され2月にオープンした「三原城跡歴史公園」を、ぐるりと歩きながら、昔日のままのお堀の向こうに、三原三代の顔を持つ石垣を見ます。その先には新幹線在来線そして街並み、屈指の海城であり「浮城」と呼ばれた当時の面影はすっかり失われてしまいましたが、450年前に思いを至らせる石垣を随所に残す珍しい景観となっています。古にはタイやヒラメが泳いでいた(?)お堀には、世界に誇る阪井養魚場の鯉が放流されました。それに先立って昨年10月にはお堀の水を抜き市民による「かいぼり隊」によって清掃が行われました。三原の顔、財産、誇りである三原城を大事にしていきたいものです。

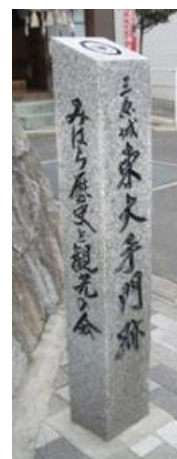
この三原城跡歴史公園は過去住宅店舗が並んでいましたが、かつて、京都から九州へ至る西国街道、今でいう国道だったのです。まずは城内への東の入り口、「東大手門跡」を訪ねます。

道標



[後藤門(絵図は後東門)]
(個人蔵の古絵図を昭和41年に三原市図書館が複製した図面より)

[東大手門]



[東大手門跡]

縦横 18cm x 15cm
前面高さ 106cm
後面高さ 110cm

大手門は城内に入る最初の門、正門です。全国的にも珍しいのですが、街道がお城の中を通っているために人々は通常は立ち入ることのできないこの門を必ず通ったのです。但し、お城ですから門は、明け六つから暮れ六つまでしか開いていません。およそ朝6時から夕方6時くらいでしょうか。東町西町の人々は、門が閉まると背後に聳える桜山の裏の谷、「大目木峠」を越えたといわれています。古絵図によればこの「東大手門」を入り西へ行くとすぐにまた「後藤門」を通過しなければなりません。両門とも行止まりかのように壁で遮り北に向きを変えて門をくぐりさらに西向きに…とすんなり通らせてはくれません。さすがに城内です。このあたり一帯は、上級武士の屋敷が並んでいたため後に「館町」と名付けられました。街道は南に下りさらに「榎ノ門」を通り「西大手門」をくぐって城外に出ます。

記念碑



館町にある三原市立三原小学校を訪ねます。西国街道からすぐ北に沢井常四郎氏の元三原図書館跡を左に見て校庭に入ります。西側の通称「やなぎの坂」と呼ばれる、今は枯れてしまって大きな柳の切り株痕の残る坂を上って、南門を入りすぐ左手にこれら記念碑が建てられています。



不断梅の碑



〔 勧学「道」碑 表 〕

〔 勧学「道」碑 裏 〕

〔 不断梅 〕

高さ 351 cm
 横幅 97 cm
 厚さ 33 cm

高さ 92 cm
 横幅 36 cm
 厚さ 16 cm

勧学「道」碑です。碑の表には、隆景公縁の京都大徳寺黄梅院の、住職小林太玄師の揮毫による「道」の文字。「三原小創立百十年史」によれば、「聖賢の道」から「道」の文字をとり、建学の心をくみ、現代を見直し人間性の回復をねがって、昭和52(1977)年に建立されたものです。

この三原小学校のルーツは古く慶長元(1596)年、隆景公が武士や庶民という身分に拘らず、学問を奨励、下野国足利学校から白鷗老師を招いて開いた三原足利学校に由来しています。幕末三原城主浅野忠敬により明善堂として再興されました。明治になって三原小学校となり、一時本丸御殿を校舎としていた古写真が残っています。碑前にある「不断梅」の碑と梅の木、これも下野国足利学校にある、決して実が落ちないといわれる梅の木なのでのでしょうか。受験生のゲン担ぎになりそうです。

隆景公は筑前名島にあるときにも、長い戦乱で学問の衰退を嘆き下野足利学校に範をとり「名島学校」を設置しています。そうした縁から名島城跡にもこの「不断梅」の碑が三原市郷土を愛する会によって建てられています。

句碑・詩碑



勸学「道」碑のすぐ隣に、立派な「沼田香雪先生之碑」が建てられています。

沼田香雪(本名良蔵)は明善堂の教官であった父沼田竹溪の子として嘉永2(1849)年に生まれ、8歳(現在の6歳)にして明善堂に入り、明治8(1875)年広島師範学校を卒業後、三原小学校教員となり後に校長を歴任、在職41年に亘って教鞭をとられたそうです。その間、教員養成所を創立、三原女子師範学校の誘致にも尽力され、大正2(1913)年死去、香積寺にお墓があります。



[沼田香雪先生之碑]



[同副碑]

「碑」	
高さ	220cm
横	92cm
「副碑」	
高さ	132 cm
横	33 cm
厚さ	9 cm

今回句碑として取り上げたのはこの副碑です。中国の故事成句「飲水思源(水を飲んで源を思う)」の現代語訳です。物事の基本を忘れないように、他人から受けた恩を忘れないようにという戒めの言葉です。沼田香雪先生の座右の銘だったのでしょ

うでしょうか、或いは訓導を受けた方々の心に強く印象付けられた言葉だったのでしょ

うでしょうか。この副碑は、先生の碑がこの地に昭和55(1980)年整備されたことを記念して建てられたそうです。

今年もまた、この由緒ある歴史ある学校に、ピカピカの一年生が聖賢の道を歩むべく、入学したことでしょ





三原にある狛犬



今回も、大和地区の狛犬を紹介します。（神社の由緒説明文は広島県神社誌による）

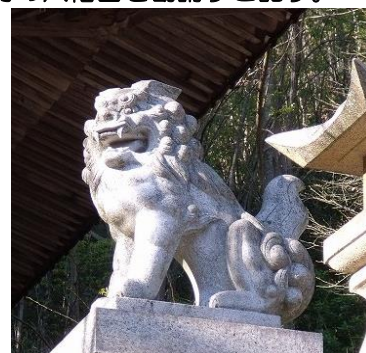
46. 篠八幡神社

三原市大和町篠491-2

伝えによると、和氣清麿の末葉、丹波国桑田郡篠村と言える処へ流居せられしが、保元元(1156)年の秋、同氏苗裔の和氣加賀守清氏という人丹波国よりこの地に移り地名を篠村と改め、宇佐八幡宮を勧請するという。昭和9年、字冠谷の八幡神社、字西野奥の八幡神社を合併し、同時に字石原414番地より現在地に移転す。なお、『芸藩通志』には丹波国篠村の八幡宮を勧請すと記す。



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	82	33	70
吽形	82	33	70
年代	平成 3(1991)年11月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



47. 蔵宗八幡神社

三原市大和町蔵宗391

昔は蔵宗村のほかにも篠村の中百石も当社の氏子であり、その名残で今に境内の表と裏にそれぞれ鳥居が現存する。明治43年字石河原の八幡神社、字火ノ大神の八幡神社を合併する。



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	92	35	70
吽形	92	35	70
年代	昭和14(1939)年1月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		



48. 大具八幡神社

三原市大和町大具862

天文24(1555)年小早川椋梨弘平が椋梨夏焼に上草井、下草井、椋梨、大具、小田の五ヶ村の総鎮守として一社を建立し、その後寛永年中(1624~44)、一説に寛文中(1661~73)に氏子争論により火災となり神社は焼失しました。その時氏子は競って神体神器を奪い合って各村別に八幡宮を奉祀したと伝えられており、当神社にはその時の神輿が残る。なお、『芸藩通志』には「八幡宮、大具村にあり、寛文6年丙午、椋梨村より勧請す」と記されている。その後、宝永3(1706)年再建。明治40年、付近の小社数社を合祀した。



	(単位：cm)		
	高さ	幅	奥行
阿形	95	35	70
吽形	95	35	70
年代	昭和11(1936)年3月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		



46. 篠八幡神社

三原市大和町篠491-2



[参道全景]



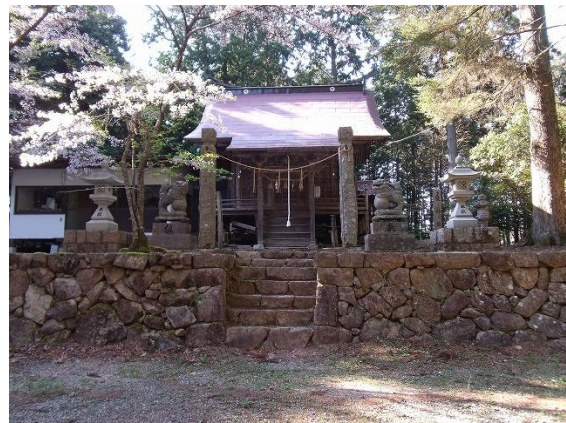
[社殿全景]

47. 蔵宗八幡神社

三原市大和町蔵宗391



[参道全景]



[社殿全景]

48. 大具八幡神社

三原市大和町大具862



[参道全景]



[社殿全景]